浅間山北麓ジオパーク

誕生記念新聞

2017/2/15　発行：ジオパーク運営委員会事務局

動き出す浅間山北麓の魅力

浅間山北麓は、火山が創り出した貴重な地形や地層などの自然に恵まれた大地です。また、火山灰土の大地を開墾し、高原野菜畑や家畜育成牧場を開いてきた人々の歴史と、そこで培われた火山災害の記録を伝える活動などが高く評価をされて、昨年9月、日本ジオパークに認定されました。認定を受け、長野原町と嬬恋村が一緒になって取り組んできた活動は、これからが本番です。

認定までの取り組み

吾妻川をはさんで浅間山側の嬬恋村河南エリアと長野原町にまたがる 280 ㎢が浅間山北麓ジオパークの範囲です。かつては〈南木山〉と呼ばれた地域をカバーしていて、嬬恋村と長野原町が一緒になって取り組むのに相応しい大地であり、すべては浅間山によって形成された「火山の大地」が広がる場所です。

ジオに取り組む

活動の芽生えは 6 年前。行政の呼びかけに観光や自然に係る人たちが集まって学習を始めました。2 年前の 3 月には長野原町も一緒になって「浅間山ジオパーク構想推進協議会」を立ちあげました。主体は実動部隊でもある「運営委員会」で、多くの住民らの参加によって動き出したのです。各地に足を運んで様々な資源を確認し、参加型の講習会も重ね、また、優れた火山学者による学習会を設けながら、賛同してくれるサポーターも増えて今では 90 名ほどになっています。回を重ねてくると、浅間北麓はジオの大地として素晴らしい、という声が多く上がるようになりました。

候補地に名乗りを上げる

ガイドの会の組織化が進む中、昨年の4月ようやく、活動の継続と発展を願って、「浅間山北麓ジオパーク」としての認定申請書を出すことができました。申請すると審査員ら関係者にプレゼンテーションしなければならず、リハーサルを重ねて5月、千葉・幕張の大会で発表しました。大会には全国から7か所の認定申請地が審査に臨む大きな大会。さらに8月、今度は審査員による最後の現地審査を2日間受けて、秋にその結果を待ったのでした。

そして、承認へ

今、日本には認定されたジオパークが 43 地域あります。その中で火山を扱うジオパークは半数以上にも及ぶことから、浅間北麓は、いわば火山を有するジオパークの〈本命〉として名乗りを上げての申請でした。9月9日の発表まで関係者にとっては長い時間でしたが、無事認定を受けました。しかし、ジオパーク活動は認定を得ることが目的ではなく、特色ある資源を保全・活用して地域の人とその良さを共有し、訪れる人達に魅力あるパーク（公園）を紹介することが課題ですから、ようやくスタート台に立ったところ、と言えるでしょう。

▲幕張でのプレゼン会場

審査発表のコメント！

審査期間を経て昨年は、浅間を含む5カ所の地域が認定を受けました。以下審査結果コメントです。

「浅間山北麓ジオパークは、浅間山の近年の噴出物が作る地形や噴火災害の遺構などの国際的価値の高いジオサイトを持ち、火山灰土や高原の冷涼さを活かした農畜産物の恵みを有している。夏場人口が住民の5倍にもなる観光地の環境を背景に、火山防災を意識したジオパーク活動が、住民にも受け入れられはじめている。今後、日本ジオパークとして展開することによって、日本ジオパークネットワークへの貢献も少なくないと考えられる。大手観光企業との連携も進んでおり、ジオ資源を活用した地域の持続的な発展が期待できる。以上により日本ジオパークとして認定する。」と講評を頂きました。

ジオサイトに行ってみよう

（ジオのアサマンです）

ジオパークの見どころ(ジオサイトと呼ぶ)は、具体的に学べる場所が決めてあり、案内板や説明板などの設置を進めています。浅間山北麓ジオパークにはジオサイトが全部で38か所ありますから、ジオの拠点施設で相談して、テーマや都合にあわせて行ってみましょう。また、専任のガイドの案内もおこなっていますから利用すると、理解も深まります。

6つのエリア 計38ヵ所のジオサイト

浅間山北麓ジオパークでは、一日で回れる範囲を区域的に6つのエリアに分けて扱っています。①山頂エリア②鬼押出しエリア③北軽井沢エリア④湯の丸エリア⑤鎌原大笹エリア⑥吾妻川エリアがあります。ジオサイト（見どころ）はこの中に38ヵ所設けています。

具体的にどんなジオサイトがあるのか見てみましょう。例えば**北軽井沢エリアのジオサイト**は①浅間大滝・魚止めの滝②旧草軽電鉄北軽井沢駅舎③六里ケ原の道しるべ観音④浅間牧場⑤流れ山⑥古瀧の6カ所のポイントを見ることができます。廃線散策人気の駅舎や不思議な流れ山はちょっと面白そうですね。

もう一カ所、**鎌原大笹エリア**にはこんなジオサイトがあります。

①鎌原村・鎌原観音堂②鎌原用水③嬬恋高原キャベツ畑④浅間軽石流⑤追分火砕流⑥古嬬恋湖⑦大笹の関所・抜け道の碑⑧鎌原城址、があります。約 20 万年前にあったという嬬恋湖、それを埋め尽くした浅間の火砕流の話は壮大ですね。また真田一族が活躍した宿場や城址も歴史ロマンです。ここは是非ガイドと一緒に廻りたい場所です。

詳しくはジオパークの拠点施設に問い合わせしてください。

ジオツアーや学習会に参加してみませんか

地域の成り立ちや火山との関わり、先人たちが築いてきた歴史や文化などを伝え、語り継いで魅力を発信していくことはジオパーク活動の大切な取り組みです。次の世代を担う子供たちにも教育関係機関と連携して学習機会を増やしていきます。ただいま新年度からの年間取り組みを計画中です。開催の都度ご案内もいたしますので機会を見て参加してみてください。また諸計画はホームページからもご覧になれます。

ジオガイドを利用しましょう

ジオパークの運営委員会には「浅間山ジオガイドの会」があります。これまで、火山や地質、歴史・文化などについて研鑽を積んで昨秋、スタートいたしました。研修を受けて現在 36 名のジオガイドがいます。ジオサイトを中心にご案内いたします。ボランティアガイド制度もありますから是非ご利用ください。

案内ネットワークを活用しましょう

いきなりジオサイトに行っても理解が深まりづらいことも多いはずです。そこで、より詳しい情報が得られるように総合案内所を JR 万座・鹿沢口駅前にある観光案内所の2階に設けています。もちろんここで説明を受けたり資料を読んだり、テーマに沿って訪ねるサイトを決めることもできる施設です。また、各エリアに対応した拠点施設をネットワーク化していますから活用すると理解も深まるのでお勧めです。

ネットワーク施設

◇**ジオ総合インフォメーションセンター**
（観光案内所２階）ジオパーク事務局
TEL　0279・82・5566

◇山頂エリア（高峰・黒斑山など）
高峰高原ビジターセンター
TEL0267・23・3124

◇鬼押出しエリア
浅間園・浅間火山博物館
TEL0279・86・3000
鬼押出し園
TEL0279・86・4141

◇北軽井沢エリア
北軽井沢観光協会
TEL0279・84・2047

◇湯の丸エリア
鹿沢インフォメーションセンター
TEL0279・80・9119

◇鎌原大笹エリア
嬬恋村郷土資料館
TEL0279・97・3405

◇吾妻川エリア
道の駅八ッ場ふるさと館
TEL0279・83・8088

パンフレット・詳しい問い合わせ先
浅間山北麓ジオパーク事務局
TEL/FAX　82-5566
Mail
geo-asama@vill.tsumagoi.gunma.jp
HP　http://mtasama.com/

この新聞は企画・広報・観光委員会が担当しました

浅間山が創った私たちの風土

―― 浅間北麓には物語が詰まっている ――

浅間山北麓ジオパークエリアは、関東の最上流域にあり、日本海側との分水嶺に位置する高原地帯。ここでは、火山が大地をつくり、大地が人々の暮らしをつくってきました。

誰にも見えない？素顔の浅間山

あの美しい富士山、実は二つの山を覆うようにして今の円錐形の形ができています。では浅間山は？やはり同じようにあの山体の下に大きな火山が二つありました！最初のひとつは黒斑火山。24,000年前頃に、その高さが2800mあったと言われる山体が大崩壊し、外輪山として今の黒斑山だけ残りました。次に東側に現れたのが仏岩火山(約11000～17000年前)。この山の痕跡はガイドに聞かないと判りづらい場所ですが、この山が浅間火山形成史上、最大規模の噴火活動をしました。この二つの火山によって浅間高原の地形が形づくられたのです。ちょうど氷河期の「寒の戻り期」という寒冷期でもありました。そして最後に今の前掛火山・火口が中央に現れたのです。8500年前頃から活動が始まっていますから、長野原の岩陰遺跡で縄文人骨(8300年前)が発見された時代、また毛無し峠のすぐ下にある湯倉洞窟の縄文人(7000年前)などが狩猟生活をしていた時代です。この時代は温暖で暮らしやすかったと言われますから、噴火のたびに逃げ出す獣たちを捕獲し、火山の恩恵を受けていたのかも知れません。見上げる浅間山の山体には3つの顔があるのです。

▲写真提供:長野原町

火口と前掛山、奥が外輪山の黒斑山↑

古代の嬬恋湖を埋めた火山の力

およそ20万年前にあったと言われる巨大な嬬恋湖。その湖底堆積物の層をジオサイトで見ることができます。万座・鹿沢口駅の崖は仏岩火山期の火砕流でできた台地です。

吾妻川がここを侵食して今の崖になっていますが、高さ50m にも及ぶ堆積物を噴出した火山のエネルギーは、私たちの想像を超えるパワーです。そして、天明3年の8月の噴火時に鎌原土石なだれはここを流れ落ちたと言われています。また応桑地区の台地は山体崩壊した黒斑火山の岩屑なだれで形づくられた上に仏岩火山の降下軽石が約 1.5m 堆積して形成されているのです。北麓のエリアは地球の火山活動によって大地の形が変遷した場所です。

クロボクの土には火山灰の驚く作用があった

地元では、土は黒くて当たり前ですし、「黒ノボウ」とか「ノボウ土」と昔から呼んできました。でも戦前までは文字通りのデクノボウで見かけによらず使えない土の代名詞でした。黒ノボウは火山灰が堆積したエリアに生成する土です。ススキや笹が生える痩せた土として明治・大正にかけてその改良に取り組みましたが成功しませんでした。

なぜ黒い土なのか、なぜ厚く堆積するのか？解決したのは戦後です。もともと軽くて、柔らかで、しかも深い層まで均一となっている特性、それを作り出したのは火山灰に含まれる特有な成分でした。この成分が腐植物と強固に結合して離さないために腐植成分を植物が吸収できず、吸収されないから堆積していく、というものでした。戦後、改良方法が見つかって今は優良農業地帯に貢献する火山灰。それは活動する火山浅間山の恵みそのものです。

山麓にブラックホール？溶岩の穴はなんの跡か

藤原地区の山麓に突然現れる地面の穴はよく見るとあたり一面に点在しています。まるで地底につながるブラックホールみたいな穴。実は 230 年ほど前の天明 3 年にできた火山の活躍跡でもあるのです。案内板には「樹型」と書いてありますから大樹の林があった証です。溶岩樹型と案内されていますが、吾妻火砕流が上流から取り巻いてできました。富士山にもある溶岩樹型は流動性の高い溶岩なのに対して、ここでは火砕流によって出来た貴重な樹型です。でも、山麓がすべてこのような樹林だったのかと言うとそうではなく、当時ここが幕府直轄の指定林「御留山」でしたから斧が入ったことがない山林だったのです。樹木も栂・樅・落葉松・楡等の林だったと記録されています。そして、災害の翌年の正月でも山一帯はまだ熱く、この近くの湧水は温泉になり、大笹村に引湯されました。

浅間山北麓は南木山と呼ばれた

吾妻川沿いの集落を除けば、浅間山麓は鳥居峠から二度上峠まで江戸幕府の所領地でした。明治になると政府は直轄地を強化し、さらに人々の出入りを一切禁止したので地元の集落は払下げ運動を明治 16 年に起こしました。あらゆる手段を講じて月日が経ち万策尽きたころ一人の福岡藩士が運動を預かり、独り10年に及ぶ交渉の末、明治35年末、ついに払下げを勝ち取りました。この土地が南木山です。その面積136㎢。嬬恋村も長野原もこの払い下げにすべてを託した時代でした。今年は明治150年。浅間山北麓の活用が始まってから、115 年の歴史です。古くから親しまれた南木山という地名は今日「浅間高原」と呼ばれ、ジオパークのメイン大地です。

西吾妻に文化を運んだ高原列車

明治に入っても浅間高原は中山道・追分宿などから草津温泉に訪れる客の馬による輸送が盛んでした。しかし明治 26 年、横川・軽井沢間にアプト式鉄道が開通し信越線が全面開通すると馬の輸送では間に合わず、新たに軽井沢～草津間に軽便鉄道が計画され大正6年には狩宿地区の吾妻駅まで電車が入りました。さらに15年には草津温泉まで全線が開通し、西吾妻エリアは大きく変わりました。温泉客を中心にした輸送はやがて沿線の別荘や観光客の利用が増え、吾妻川水系での発電所建設にも役立つとともに、西吾妻の豊富な硫黄鉱物が運び出されました。さらに、浅間山麓の天然林の搬出もおこなわれました。六里ヶ原一帯にはレンゲツツジの大群落の見学で賑わう季節もあって、地名も「つつじヶ原」と呼ばれるなど、廃線される昭和37年まで、草軽電車は西吾妻に文化を運んだ動脈でした。今も北軽に残る駅舎は浅間高原を学ぶジオサイトです。

▲写真提供:嬬恋村

一緒にジオパーク活動をやりませんか。
会員・サポーターを募集しています。
詳しくは事務局までどうぞ。

※このチラシは吾妻県民局の支援をいただき作成しています。

※ジオパークとは、「ジオ(地球)の地形や火山、地質などの自然に親しみ、地球の成り立ちや、そこに暮らす人々や生態系について考えることができる場所(公園)」のことです。ユネスコの支援で設立された「世界ジオパークネットワーク」に基づき日本ジオパーク委員会が日本ジオパークを審査・認定しています。教育活動や観光等に活用する活動が求められています。